



日 立 市

日立の戦災

小中学生 平和学習資料



かくへいきはいぜつ 核兵器廃絶・平和都市宣言 せんげん

世界の平和と安全は、人類共通の願いである。

いま、国際的な核軍拡競争は、核戦争の危機を増大し、人類生存の恐怖きょうふとなっている。

私たちは、再び「広島」「長崎」のあの惨禍さんかくを繰り返さないためにも、すべての国に対し、核兵器の廃絶と軍縮ぐんしゆくを求め、いかなる国の核兵器も許ゆるしてはならない。

一瞬にして尊とうとい命うばを奪い、財産を灰にしてしまったあの悲惨な戦争をいかなる理由があろうとも繰り返してはならない。

日立市は、日本国憲法の恒久平和の理念に基づき、核兵器の廃絶と人類永遠の平和を希求ききゅうし、ここに「核兵器廃絶・平和都市」となることを厳粛げんしゆくに宣言する。

昭和60年12月24日

日立市

目 次

核兵器廃絶・平和都市宣言

年 表	1
1 戦争中のくらしと軍需工場	3
2 日立の戦災	11
3 戦後のくらしと復興	23
4 日立市の平和啓発事業	27

昭和

西暦	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三	一九三四	一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇
昭和	五	六	七	八	九	一二	一三	一四	一五
月		九	三	二	三	七	四	九	

日本のできごと

隣組を組織する
 政党が解散する
 ドイツ・イタリアと軍事同盟を結ぶ
 東南アジアへ軍を進める
 物価を統制する
 賃金を統制する
 第二次世界大戦がはじまる

国民全員を総動員する法律を出す（国家総動員法）

日中戦争がはじまる

日本、国際連盟を脱退する
 国際連盟、満州国を認めない決議をする
 日本、満州国をつくる

中国が日本軍の攻撃を国際連盟にうったえる
 満州で日本軍が中国軍を攻撃する（満州事変）



日立のできごと

日立製作所が海岸工場をつくる



▲空から見る日立市街地 1935(昭和10年)ごろ
 (寺山いつ子さん提供)

日立製作所が軍需生産をはじめめる
 日立町と助川町が合併し日立市が誕生する
 多賀町誕生、多賀工場をつくる

時		代		一九四五（昭和二〇）年八月一五日 終戦（日本が降伏する）		
一九四一	一九四二	一九四三	一九四四		一九四五	一九四六
一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二
一一				三	二	四
<p>日本軍が真珠湾を攻撃し、太平洋戦争が始まる</p> <p>米が配給制になる</p> <p>小学校が国民学校へ改められる</p> <p>衣料が配給制になる</p> <p>中学生などが軍需工場ではたらくようになる</p> <p>大学生が戦場に行くようになる（学徒出陣）</p> <p>アメリカ軍による空襲が始まる</p> <p>小学生が空襲をさけ、農村へ集団疎開をする</p> <p>東京大空襲（一〇日）</p> <p>地方都市や港湾へ空襲が始まる</p> <p>沖繩戦が始まる（二六日）</p>				<p>国際連合に加盟する</p> <p>日米安全保障条約が結ばれる</p> <p>サンフランシスコ平和条約が結ばれる</p> <p>日本国憲法が公布される</p>		
				<p>平和通りが完成する</p> <p>日立市が戦災復興都市計画の対象となる</p> <p>模範原爆が投下される</p> <p>七月一九日 焼夷弾攻撃による空襲</p> <p>七月一七日 艦砲射撃</p> <p>六月一〇日 一トン爆弾攻撃による空襲</p> <p>日立製作所が日立・多賀工場を疎開される</p> <p>日立製作所が会瀬・電線工場などを増設する</p> <p>市内の工場ではたらくようになる</p> <p>宮城・福島・山形県の中学生が</p> <p>地元中学生などが工場動員ではたらくようになる</p> <p>※女子挺身隊：未就労・未婚の二十五歳未満の女性</p> <p>女子挺身隊が工場ではたらくようになる</p>		

1 戦争中のくらしと軍需工場

◆工場ではたらいっているのは誰だろう？



▲日立製作所海岸工場での教育実習風景
1944(昭和19)年(日立製作所日立工場提供)



▲山手工場・電錬工場 1926(大正15)年
(小平記念館提供)



▲多賀工場学徒動員(水戸市立高等女学校工場)
1944(昭和19)年(日立製作所多賀工場提供)



▲日上市女子勤労報国隊
1943(昭和18)年8月
(日立製作所多賀工場提供)



▲佐乙女工場の女子挺身隊
1944(昭和19)年ごろ
(日立製作所日立工場提供)

大正から昭和初期にかけて日上市は工業都市として大きく発展し、多くの工場がつくられました。戦争が始まると、政府は非常時として、国民が一丸となって戦争に協力することを求め(戦時体制)、市内の工場は、戦争をする兵器をつくるための工場(軍需工場)となりました。さらに新しい工場が次々と建てられ、多くの市民が働きましたが、兵士として戦争へ行く人が多くなると、労働力不足になりました。働き手を増やすために、小学生や中学生が工場がくとどういんで働くようになりました(学徒動員)。

◆戦争中、人々はどのような暮らしをしていたのでしょうか。



ぼうくうずきん
防空頭巾
空襲のときに頭にかぶり、
命を守る道具

戦争中の家族



国民服
配給される男性の
服。足にはゲート
ルを巻きます。

もんぺ
女性も空襲にそなえ、
動きやすい服装をして
いました。



とうかかんせい
灯火管制
家の明かりがもれ、攻撃されないように
生活していました。



ほうこうぶくろ
奉公袋
入営(軍隊に入ること)や
戦地へおもむくときに、
必需品を入れて行った袋



すいとう かわ
水筒と革製かばん
戦地で実際に使用していた水筒と
革製かばんです。



衣料切符
服を手に入れるためには、
配給切符が必要でした。



はちまき
工場ではたらく学徒たちが
頭に巻いた「神風」のはちまき。
前ページの女学生たちも巻い
ています。

戦争がはげしくなると米や野菜、衣料が配給制となりました。まちのなかは、「欲しがりません 勝つまでは」「ぜいたくは敵だ」などの標語があふれました。また、隣組となりぐみがつくられ、集団行動が基本となり、戦争に協力しない人はきびしく取りしまられました。

◆戦争中の学校は、現在の学校とどのようにちがっていたのでしょうか。



いもんぶくろ
▲慰問袋を戦地へ送る日立高等女学校生徒 1939(昭和14)年ごろ(小峰安行さん提供)



▲戦時中の夏休みの教材 戦争色の強い内容となっています。

学校も軍隊式になり、1941(昭和16)年には、小学校は国民学校という名前に改められ、戦争の訓練などが行われました。

やがて、都市や工業地帯が空襲くうしゅうを受けるようになり、児童たちは空襲をさけるために地方へと避難ひなんしました(集団疎開そかい)。日立市は工場が多くあり、空襲の危険が高かったので、疎開する児童が多く、国民学校の児童数は次第に減っていきました。

◆戦争へ向かう人々を見送る家族は、どのようなことを思っていたのでしょうか。



▲大甕駅^{しゅっせい}で出征兵士を見送る人々(五来正明さん提供)



▲鹿島町^{にゅうえい}入 営祝 1943(昭和18)年ごろ(蛭田和生さん提供)



▲兵士 昭和10年代
(五来正明さん提供)

戦争中は、満 20 歳を迎えた成人男性は、国民の義務として徴兵検査^{ちようへいけんき}を受けました。その後、召集令状^{しょうしゅうれいじょう} (赤紙^{あかがみ}) がくると、戦争へ行きました。戦況がきびしくなると、大学生なども戦地へ向かうようになりました (学徒出陣^{がくとしゅつじん})。

戦災体験談

戦争と私と少年時代

くまがい かつのり
熊谷 勝典 さん（終戦時 13 歳）

私が、これが戦争なんだ、戦争の始まりなんだ、と思い浮かべるものに灯火管制とうかかんせいがあります。小学校 3 年生のころとっておりますが、当時の日立市は助川町と宮田町の合併の時代で、小学校の名称も国民学校こくみんがっこうに改称されました。

私は今の日立電線工場のあたりの桜内社宅と呼ばれていた、日立製作所の社宅に住んでおりました。この社宅内は全市でもと思われませんが、時刻のお知らせは柱時計でもなく、ラジオの放送でもなく、日立製作所の各工場から流されるサイレンの音でした。朝 6 時に鳴らされるサイレンは朝だ起きろ、7 時のサイレンは工場で作業が始まるぞ、12 時のサイレンはお昼ご飯にしようという具合でした。

日立製作所からのサイレンは、間隔かんかくのすこし長い連続音けいかいけいほうの警戒警報、間隔の短い連続音くうしゅうけいほうの空襲警報に区別され、桜内社宅内の全家庭に訓練としての夜間の灯火管制がしかれました。ひと部屋だけに明かりをつけ、家族全員が、電灯でんとう笠かさに明かりが漏れないように筒状の暗幕つつあんまくがかぶせられた電灯の下に集まりました。

8 月にソ連軍の日本領土侵攻りょうどしんこうのニュースが入り、15 日の午前中に重大ニュースの発表があることがラジオで報道ほうどうされました。軍国少年の私には、この発表は日本は強いんだ、全世界の国々を相手にしても戦争には負けないんだ、ソ連に宣戦布告せんせんふこくをするんだと、想いを強くしたものでした。

しかし、正午のラジオ放送は、日本は連合国れんごうこくに無条件降伏むじょうけんこうふくをするという内容のものでした。

軍国少年の私としては、体中の力が抜けた思いでしたが、その日の夜、各家庭から明かりが漏れ、夜は暗くしなくてもいいんだと、安堵感あんどかんも浮かんできました。

夜半やはん、警戒警報けいかいけいほうに続いて空襲警報くうしゅうけいほうが発令され、各自カバンや荷物を背負い、近所の人々と西成沢の山の中に逃げたり。庭に畳み 1 畳大ほどの四角い防空壕ぼうくうごうを掘り、布団などの寝具しんぐを埋めたり。土手に防空壕ぼうくうごうを掘り、防空頭巾ぼうくうずきんを被り、その中で身を潜めたり。そんなことをする必要はもはやないのです。

戦争中の中学校

きたみ とくじ
北見 徳治 さん（終戦時 16 歳）

中学 2 年生（今の日立一高）になると、戦争に勝つために、学校は軍の予備校化していった。英語の授業はなくなり、体育は軍事訓練、体育の先生は配属将校の助手になった。授業が始まる前には「軍人の賜わりたる五ヶ条」を全員で斉唱した。1 人でも斉唱をさせられ、声が小さいと「大きな声で」と気合いを入れられた。

授業は地上戦の仕方としての歩伏前進、傘型展開をする。腹ばいになり、右手に木銃を持ち、左腕で前に進むので、服が汚れ、ひじが痛かった。最後は突撃。立ち上り、走って行き、わら人形を「エイヤー、エイヤー」と何度も突く。声が小さいと、気合いが足りないと言われ、やりなおしをさせられた。

登下校は足にゲートルを巻き、白いカバンを肩にかけ、木銃をかついだ。町中いたる所、軍事色になっていった。

夜行軍もした。夕方 4 時に中学校集合、第 1 回は高萩小まで、第 2 回は常陸太田駅まで木銃をかつぎ歩いた。夜見る景色は、今のように道路には街灯がないので、こんもり茂った樹木が、夜空におぼけのように見え、何となく気味悪い。帰りは眠くなり、眠りながらも歩いている。「一時止れ」の号令が出ても歩いていて、前の人に当たったりした。

校庭にはグライダーが搬入され、上級生が乗り、ゴムロープをみんなで引く。地上 2 メートル位は滑空する。気持ちが良いだろう、乗りたいなど眺めた。

雨天体操場には、鉄砲が掛けられ、4、5 年生は校庭のすみにつくられた射撃場 での的を撃つ訓練が始まった。

2 年生になると、先生は予科練航空隊の受験を、熱心にすすめてきた。受験し、兵隊になり国を守る。非常に大切なことである。しかし、場合によっては戦死する。受験するということは、死を覚悟することだ。

机を並べ仲良しだった H 君は、予科練航空隊に合格し、さっさと行ってしまった。

私はどうすれば良いのか、死がこわいのか、おちつかず、悩み、苦しみ、集中して勉強ができなくなった。

とうとう私も、この学校全体での熱気に押され、予科練を受験する。しかし、視力、身長が少し足りないと、不合格。恥ずかしかった。どうすれば良いのか、また悩み、苦しむ。国のため死ぬ、死を恐れているのか。

しばらく過ぎて、戦車兵の募集があった。今度こそはと受験する。「合格」の通知が来た。本当にうれしかった。昭和 19 年 9 月、戦争は増々激しくなり、戦争用品増産のため、中学生も学徒動員となった。

出征する人を見送る

小学校 6 年のころ、学校から佐和駅に出征する人を見送りに、何度も行きました。

駅の待合室や広場は日の丸の旗^{はた}や幟^{のぼり}を持った人でいっぱいでした。

出征する人は肩に、「祝^{しゅく}出征^{しゅっせい}」と書いてある白いたすきをかけていました。

「〇〇君^{ばんざい}万歳」と、だれかが叫ぶと、みんなはそれに合わせて、「万歳万歳」と日の丸や両手をあげました。

汽車^{きしゃ}がきて乗り込むと、窓から身をのり出して、手をふりました。私たちも手や旗を大きくふり、別れをおしめました。

汽車がさってしまった後、私は涙をこらえていました。

帰り道は、さびしくなりました。

千人針

私たち女性は、兵隊さんにお守りとして、千人針^ぬを縫いました。

寅^{とら}は「千里行^{せんり}って、千里帰る」ということわざにちなみ、無事を祈って始まったのでしょうか。白い木綿の手ぬぐい^{もめん}に、寅の絵と点々がついており、その点々に赤い糸で縫い玉を作るのです。寅年の人は年の数だけ作れます。

一軒^{けん}一軒^{がいどう}まわったり、街頭に立ったりして、女の人に千人針を作ってもらいました。婦人会長さんに届けたら、大変喜んでくれました。



▲千人針の下絵を描く女性（嶋根弘さん提供）



▲千人針

女学校^{じょがっこう}2年生の時、学徒動員になり多賀工場へ行きました。工場の入口で、ハチマキをしめ、今日もがんばるぞ、と気持ちを引きしめプレス課^かで鉄板のイバリ取りを毎日毎日しました。

円筒^{えんとう}の形に抜けている穴のへりのイバリを取るのですが、初めは取れなかったり、取り過ぎたりと、うまくできなくて、何回も注意されましたが、少しずつ上手になって、ほめられるようになりました。

これが戦地の兵隊さんに、役立つ機械^{きかい}になると思うと、仕事にはげみが出ました。

少年期の回想

こばやしすすむ
小林 進 さん（終戦時4歳）

私が父と別れたのは、3歳に届く頃でした。船で戦地に行く時、久慈川河口で日の丸^{こぼた}の小旗を振って見送りましたが、父の姿を見ることはできませんでした。出征する父親の多くは、手を振って別れを告げているのに、私の父親はなぜ姿を見せなかったのか。いま思えばよほど切なく、つらかったのか。三人の子供たち（兄5歳、弟1歳に満たない）を残してゆかなければならない思い、きっと陰ながら涙^{なみだ}で別れを惜しんでいたと思います。

母に残した最後の言葉は「いま、日本は負け戦。戦地^{どういん}に動員されるのは、生きては帰れない。子供たち^{たの}を頼む」。涙ながらに言ったそうです。

それから私は、田舎^{いなか}の母の実家に、小学校へ入学するまで預けられました。その頃、おばあさんは元気だったので、かわいがられて育てられました。久慈小学校に入り、時が経つにつれ、苦難^{くなん}との闘^{たたか}いでした。

当時は戦後の混乱期で、食べてゆくのは精一杯でした。学校へ通う着る物は、みすぼらしかった。なぜ貧乏な生活でいじめられるのか。父がいれば、こんな目に合わないのに。そんな時、校庭の片隅にたたずみ、そこから太平洋を遠く眺^{なが}め、「父ちゃん、本当に死んだのか。死なないで帰って来てよ」と、胸の内^{さけ}で叫んだ。水平線にポッカリと浮かんだ一片の白い雲が、おぼろげに父の顔に見え、何か言っているようにも思えました。

2 日立の戦災

◆ 3度にわたる大きな攻撃を、日立市が受けたことを知っていますか。



こくえん
▲黒煙をあげる日立製作所海岸工場 1945(昭和20)年6月10日(工藤洋三さん提供)

1944(昭和19)年に入ると、アメリカ軍による日本本土への空襲くうしゅうがはじまりました。東京、名古屋、大阪、神戸など大都市の軍需工場や軍事施設が攻撃され、1945(昭和20)年の東京大空襲とうきょうだいくうしゅうでは10万人もの人が亡くなりました。大都市が焼け野原になると、攻撃目標は地方都市へと移っていきました。

日立市には多くの軍需工場があったため、攻撃の対象となり、3度にわたる大規模な攻撃を受けました。これらの攻撃により、1,539人の尊い命がうばわれ、まちの6割以上が焼け野原となってしまいました。

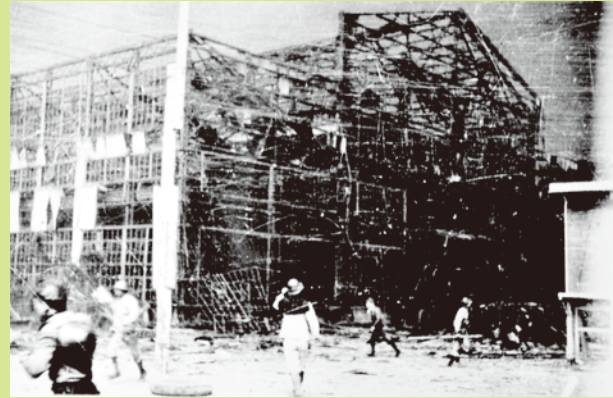
くうしゅう

ばくだんこうげき

空襲 1トン爆弾攻撃 1945(昭和20)年6月10日 午前9時ごろ



▲伊藤長助さん画(日立市郷土博物館蔵)



▲1トン爆弾で破壊された日立製作所海岸工場
(日立製作所日立工場提供)

日立製作所海岸工場は100機を超えるアメリカ軍の飛行機が投下した1トン爆弾806発の攻撃をあびました。この日は休日で、はたらいっている人は少なかったのですが、634人が亡くなりました。爆弾は工場周辺にも落ち、一般市民も亡くなりました。

1トン爆弾攻撃の被害¹⁾

死者	886人
重軽傷者	716人
行方不明	29人
全壊戸数	1,486戸

かんぼうしゃげき

艦砲射撃 1945(昭和20)年7月17日 午後11時ごろ



▲伊藤長助さん画(日立市郷土博物館蔵)



▲艦砲射撃を受けた日立製作所多賀工場
(日立製作所多賀工場提供)

7月17日深夜、日立市域はアメリカ軍の船から約20分間の攻撃を受けました。日立製作所の工場が目標となり、直径16インチ(約40cm)の砲弾^{ばうだん}が870発も打ちこまれました。この夜は雨や風が強く、多くの砲弾は目標の工場をはずれ、周辺の住宅地や山林で爆発しました。

艦砲射撃の被害¹⁾

死者	436人
重軽傷者	410人
行方不明	9人
全壊戸数	637戸

1)「日立市勢要覧 昭和二十四年版」にしるされた数値

しょうい だん
空襲 焼夷弾攻撃 1945(昭和20)年7月19日 午後11時ごろ



▲伊藤長助さん画(日立市郷土博物館蔵)



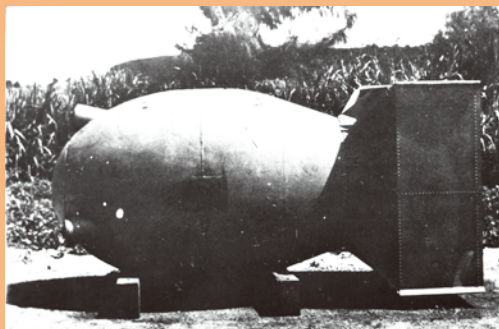
▲焼夷弾攻撃を受ける日立市街地
 1945(昭和20)年7月19日(大和和夫さん提供)

7月19日深夜、127機のアメリカ軍の飛行機は日立市の市街地に合計13,900発、960トンの焼夷弾(油と火薬がまじった爆弾)を投下しました。この攻撃で、助川と宮田の市街地のほとんどが焼けました。また伊師浜や川尻、滑川、河原子、油繩子、久慈の集落にも焼夷弾が落とされました。

焼夷弾攻撃の被害¹⁾

死者	65人
重軽傷者	103人
全壊戸数	11,000戸

もぎげんぱく
模擬原爆投下



▲模擬原爆 Pumpkin(パンプキン)
 (工藤洋三さん提供)

1945(昭和20)年7月26日午前9時すぎ、日立鉾山の精錬所をねらって約4.5トンもある大型爆弾を投下しました。

これは原爆を投下する訓練で、長崎に投下されたものと同じかたち、大きさの爆弾でした。

1945(昭和20)年4月になると、アメリカ軍が沖縄島^{おきなわじま}へ上陸し、一般市民が住むまちが戦場となりました。激しい戦闘のなか県民60万人のうち12万人以上の人々が亡くなったと言われています。

8月6日には広島、9日には長崎へ、アメリカ軍によって原爆が投下されました。1発の爆弾によって一瞬にして何万人の命がうばわれ、まちは吹き飛んでしまいました。

海外の戦地でも日本軍は敗北を重ね、全国各地が空襲で焼かれ、日本は8月15日、ついに降伏しました。



▲焼野原となった日立市街地 1945(昭和20)年(日立電線提供)



▲保健センターからみた現在の同じ場所

【戦災による被害の状況】

	旧日立市	旧多賀町	合計
死者	1,354人	185人	1,539人
行方不明	38人	—	38人
罹災戸数 <small>りさいこすう</small>	14,740戸	585戸	15,325戸
罹災者	73,028人	2,622人	75,650人

※1945(昭和20)年6月～7月の3度にわたる大規模攻撃による被害。1950(昭和25)年9月の市主催の慰霊祭における名簿の数値。1949(昭和24)年度の市勢要覧以降に死亡が確認され、追加されたものと考えられます。このほか、7月19日の攻撃で、旧豊浦町で死者12人、全焼家屋434戸、旧久慈町で死者14人、旧日高村で死者7人、旧坂本村で死者6人の犠牲者と被害がありました。

戦災体験談

小学校4年生の戦災体験談

みなかわ なおし
皆川 直司 さん（終戦時10歳）

昭和20年の夏、私は日立市立会瀬国民学校4年生だった。

学区内には日立製作所海岸工場がある。私の家は工場の省線門から東に向かい海岸に下る坂の近くにあった。

6月10日は朝からよい天気だった。日曜日なので女学生の姉も、小学6年生の兄も、2年生の弟も家にいた。朝早くから工場の屋上にあるサイレンが、警戒警報を知らせていた不安な朝だった。父は会社が休みで家にいたから、その日は6人の家族全員がいたことになる。兄弟は家から離れることなく遊んでいたが、連続音の空襲警報のサイレンを聞いて、あわてて庭先の防空壕に入り込んだ。

当時は空からの攻撃にそなえ、どこの家にも壕が作られており、公共の防空壕もあった。わが家の壕は、父が作った家族6人が入ると身動きもできないような小さなもので、天井に薄い板が2、3枚のせてあり、深さは1メートルくらいだった。

そのうちに飛行機の爆音とともに、無数のヒューンヒューンという音と、今まで聞いたことのないものすごい爆発音が連続して聞こえた。壕の中でうずくまったまま、手を顔面に持っていき、親指で両耳を押さえ、他の指で両目を押さえた。学校で何度も練習した行動である。衝撃音で耳の鼓膜が破れないように耳を守り、衝撃で眼球が飛び出さないように閉じた目を押さえ、呼吸ができるように口を開け、身体を低くするのだと教えられていたのだ。

連続する爆発音、地響きと振動は、身が縮まるような恐ろしさで生きた心地もしなかった。耳を押さえる手にも力が入る。爆弾が落ちてくる時の音、炸裂する音が怖いのだ。まわりには家族がいるはずなのだが、真っ暗闇の中では自分ひとりの存在しか感じない。小さな箱の中にひとり閉じ込められ、坂を転げ落とされているような気持ちだ。

外に出てもよいとの父の声で、やっと壕の外に出た。外の太陽の光はびっくりするほどまぶしいものだった。いつも見慣れた工場のあたりには黒煙が上がり、黒い鉄骨だけの建屋が見えた。わが家は健在だったが、家の中の壁は落ち、足の踏み場もないような状態だった。

家を出て、駅方面を見ると、毎日学校へ通っていた道路はなく、いたる所に大きな穴があり、でこぼこの荒れ地と家屋の残骸が眼に入った。不規則にかたむいた電柱と、たれ下がった電線ばかりがよく見える。ポロポロの土色をした、ふぞろいのぞうきんのような布の切れ端が道路の両側の電線にぶら下がっていた。どうしてあんなにポロポロがぶら下がっているのだろうかと思議でしかたなかった。

狙われた日立工場

うちやま えいこ
内山 英子 さん（終戦時11歳）

私は6月10日を忘れない。

銀色に光る大きなB29が、会瀬小学校の上にせまって来た。何機位だったかは覚えていない。その時、小学校5年生の私は、3年生、1年生、3歳の弟や妹たちと、日立工場の土手で、ふかしまんじゅうを作ってもらうために、よもぎ摘みに夢中になっていた。

とっさに危険を感じ、小さい弟を背負い、他の弟、妹を引きずる様にして、近くの岩穴の防空壕に走った。ただただ走った。声もない。弟たちも泣かない。やっとどり着いた時、入口は閉められてしまった。

その時、突然、耳をつんざく轟音と爆風がすさまじくひびき、小石がたくさん飛び、土が舞った。日立工場への爆撃が始まったのだ。

音が止んだ時、入口が開けられ中に入れた。間もなく前より強い揺れと衝撃。うずくまって必死に、目、耳を押さえている顔に、岩穴の中にたまっていた水がバシャバシャとはねる。母はどうなったのか考える余裕すらなかった。ひとしきりの爆撃が止んだ時、母たちがころがり込んで来た。おくれてしまった母は、大きなトランクを持って、途中の粗末な防空壕に一時避難していたらしい。その防空壕は、直撃で跡形もなく、すり鉢状の大きな穴となっていた。トランクはどこへやら、母の身代りとなって吹き飛んでしまったのだろう。周りの家並みも消えてしまった。

この日は、日立工場に1トン爆弾が500発も落とされたそうだ。工場はほとんど破壊され、鉄骨だけの無残な姿となっていた。ちょうど上役たちの会議があったとか。たくさんの犠牲が出た。工場の周りの家々も被害を受け、亡くなった人も多かった。地下工場もあると思っただけの攻撃だったのだろうか。我が家も爆風や破片で壊され、ただ白いにわとりが2羽、じゃが芋畑にヨタヨタと歩いていた。



▲1トン爆弾で破壊された海岸工場電動機工場
1945(昭和20)年6月10日(日立製作所日立工場提供)

日立の戦災

わたなべ まきこ
渡辺 真喜子 さん (終戦時7歳)

6月10日、父方の叔父おじがその日、海岸工場しゅきんに出勤していたのです。当時、叔父は26歳けんきゅうせい、研究生として日立の寮りょうにおりました。

米軍機べいぐんきの攻撃こうげきのねらいは、軍需工場ぐんじゅこうじょうである海岸工場しゅきんでした。工場内の防空壕ぼうくうごうもろとも攻撃されました。叔父たちは防空壕に入れば安心と思って避難したのでしょう。ところが、攻撃により入り口をふさがれ、1週間、防空壕で生き埋めになっていたのです。その後、連絡れんらくを受けて遺体いたいを引き取りに行った母や叔父の兄弟たちの話では、顔は大きく膨れ、むごい姿になっていたといひます。

空襲からしばらく経って、母たちに連れられ、私も海岸工場へ行ってみましたが、子供心にこんなにつらいことはありませんでした。寮の叔父の部屋に行き、そこにあった匙さじひとつだけを遺品いひんとしていただいて帰ってきました。つらい思い出となりました。

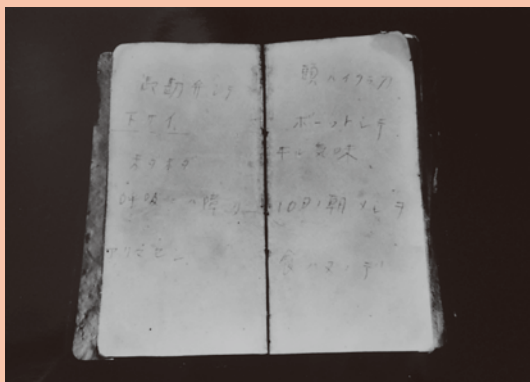
身の安全を考え、自らの命を守るために入った防空壕だったはずですが。6月10日、あの晴れた青空を叔父も見たにちがいありません。出口をふさがれ、息絶えるまでの1週間を叔父はどんな思いですごしたのでしょうか。国のために、休日も出勤して研究にはげんでいたのでしょうか。

帰りの道すがら、叔父とすごしたことを思いおこしながら歩きました。叔父は寮生活を送っており、休みの日に家へ帰ってきました。その時には、私たちに手作りのおもちゃをもってきてくれました。私には扇風機せんふうきを、弟には車などを作ってくれたのです。それらを動かして遊んだことは楽しい思い出です。

今でも空いっぱいB29の姿がまざまざと思いおこされます。7歳の子供が体験した、その時の不穏ふおんな感覚きょうふしん、恐怖心や言いしれぬ不安感ふあんかんは忘れもせず、よみがえってくるのです。戦争はいやです。

叔父さん、安らかに眠ってください。

防空壕のなかで生き埋めになった日立製作所社員の手帳



▲実際に残された手帳(日立電線提供)

1945(昭和20)年6月10日の1トン爆弾攻撃で、日立製作所の日立工場では634人が命を落としました。

特に工場内にあった防空壕は爆弾の直撃を受け、くずれてしまいました。防空壕のなかにいた人々は生埋めとなりました。生埋めになった人々は必死で外へ出ようとし、外の人々も救出作業にあたりました。しかし、多くの人々が防空壕のなかで亡くなりました。

写真は、生埋めになった社員が残した手帳です。

おこったようなさびしい顔

あんどう せいこ
安藤 靖子 さん（終戦時6歳）

忘れもしない7月17日、夜11時ごろ、ぐっすり寝^ねていた私は、乱暴^{らんぼう}にゆり起されたのです。電灯^{でんとう}も消^けされていて、まっ暗^{くら}やみをつき破^{やぶ}って聞こえるのは、いつもの不気味^{ぶきみ}なサイレンの音でした。母のうわずった声もします。ぐずぐずとはしてられません。「早く早く」と追^おいかけるように、サイレンはますます鳴^なりわたります。シャツか上着^かかをとにかく身^みにつけて、リュックサックを背負^せったとたん、どどーんと、ものすごい音がしました。家がびりっと震^{ふる}えました。「こわいっ」と思う間もなく、爆発音^{はつぱつおん}は、どかーん、どどーんと響^{ひび}きます。姉に手を取られた私は、げたをけとばしたり、石^{いし}につま^{つま}ずいたりして、ドキドキする心臓^{しんぞう}を押^おさえながら10メートルばかりさきにある防空壕^{ぼうくうごう}へ飛びこみました。

父をのぞいて家族全員そろいましたが、父は寮^{りょう}の学生^{ひなん}を避難^{ひなん}させるためにおりません。私がもう少し大きかったら父が死ぬか生きるかのさかいにいることがわかったでしょうし、また、赤ん坊^{あかちゃん}をまじえた6人の子どもたちを、ひとりで守^{まも}らなければならない母に、どれだけ感謝^{かんしゃ}したでしょう。

爆発音^{はつぱつおん}はますます激^{げき}しくなり、天井からは、ばらばらと土のかたまりが落ちて来^きます。入口からは、からだも吹き飛ば^{ふき飛ば}されんばかりの爆風^{はつぷう}とともに、かわらやガラスのかけらが飛びこみます。皆、奥^{おく}のほうにかたまり、目と耳をおおって身を守^{まも}りました。こまくをつんざくような音は、なかなかやみそうにありません。おり悪^{わる}く雨も降り出して、たちまち泥水^{どろみず}が膝^{ひざ}のあたりまでたま^{たま}ってきました。夏^{なつ}といっても真夜中^{まよなか}です。足が冷え、しびれたようになってしまいました。

およそ3時間もたったでしょうか。ようやく爆発音^{はつぱつおん}が遠^{とほ}のいて行^いきますと、ふーっと大きく息^{いき}をはき出して、「なんだろう。あの大きい音」「爆弾^{はつだん}ではありませんよ」「けがした人^{ひと}ない？」などと、口々に話し合^あいました。あとでわかったのですが、私たちは、艦砲射撃^{かんぱうしゃげき}といって、海^{うみ}から軍艦^{ぐんかん}の大砲^{たいほう}をうたれたのでした。外^{そと}はまだまっ暗^{くら}、それに、どんなになっているかわかりません。あぶないというので、夜^よが明^あけるのを長い間^{かん}、泥水^{どろみず}の中で待^{まち}ちました。

朝^{あさ}。家の様子^{ようす}は、見れば見るほどひどい。塀^{へい}は倒^{たお}れ屋根^{やね}は抜^ぬけ落ち、天井^{てんじやう}の板^{いた}が頭^{あたま}の上に垂^たれています。たんすやげた箱^{はこ}も吹き飛^とんだり、鋭^{えい}い弾^{たま}の破片^{はくぺん}がつきささってこわれたり。庭^{にわ}で弾^{たま}が破裂^{はくはく}したのでしょうか、直径^{ちけい}10メートルもある大きなすりばち型^{がた}の穴^{あな}が開^あいていました。そのそばでは逃げ場^{にげば}を失^うったにわとりが目

閉じて死んでいました。

しかし、それ以上にかわいそうだったのは寮の学生さんです。たった3か月前に喜び勇んで入寮式を済ませた1年生が、今日は大勢冷たくなっています。

姉もいちばん仲良しだった友だちの死を聞いて、おこったような顔をしていました。父や兄が家の整理をしているのを、私たち子どもはぼんやりと眺めていました。

あれから長い年月がたちましたが、夏がくるごとにあの時の姉のおこったようなさびしい顔が目に浮かびます。



▲艦砲射撃による被災した日立工場青年学校の寮
1945(昭和20)年7月18日ごろ(日立製作所日立工場提供)

「ダダダダーン」「バリバリバリー」。昭和20年7月17日午後11時過ぎ、まどろみ始めた安らかな眠りは、何の前触れもなく、いきなり、全くいきなり破られた。

ここは父が勤めていた日立鉦山の^{だいおういん}大雄院病院下社宅の一室である。東側の雨戸一面に土砂や小石がバラバラと激しく降りそそぎ、屋根と天井が「バリバリー」と云う物凄^{ものすご}い音と共にブチ抜かれ、吊っていた蚊帳^{かや}がバサリと寢床^{ねどこ}の上に落ちてきた。すべては全く同時に、一瞬^{いっしゆん}のうちに起った。無我夢中^{むがむちゆう}で飛び起き、頭が完全に目覚めた時は、投網^{とあみ}に掛かった魚のように、蚊帳の中でもがいていた。飛行機の爆音が聞こえない！これは艦砲射撃だ！共楽館付近がやられたな、と思った。

手探りで、枕元^{まくら}に畳んでおいた服をつかんで蚊帳の外へはい出した。その時、隣にいた弟が突然「アチィ！」と大声を出した。襖^{ふすま}の隣^{となり}の8畳間から「どうした！大丈夫か！」と父の声。「大丈夫だ！」と弟の返事。家族全員の無事を確認しながら、すばやく洋服に着替え、鉦山病院の前の岩山へ会社が作った防空壕^{ぼうくうごう}へ避難^{ひなん}する事を申し合わせた。そうしている間にも第2弾、第3弾の炸裂音と閃光がきらめき、土砂が降りそそぐ。一刻を争う。両親と小学4年の妹が先に雨の中へ飛び出し、弟と私が祖母^{そぼ}を連れて逃げることにした。

ところがどうした事だ。祖母は逃げないと言うのだ。祖母は「こんな雨降りの真夜中ではとても歩けない。邪魔^{じゃま}になるだけだ」と言う。2人で背負^{せお}って行くから、と言っても動かない。そして「どこにいても死ぬ時は死ぬ、お念仏^{ねんぶつ}を唱えていれば阿弥陀様^{あみだ}と一緒に^{こわ}だから怖くない」と、覚悟^{かくご}の様子である。これは本気だな、挺でも動かないなど思った。そして逆に「若い者が無駄に死んではいけない。早く行きなさい」とさとされた。それではと、4畳部屋の押入れの下の段に隙間^{すきま}を作って座らせ、周りに布団を積み上げた。「それじゃネ、行くからネ」の声を残して、2人で厚めの布団を引^{かぶ}っ被^{かぶ}って雨の中へかけ出した。

社宅の間を山の下まで一気に走り、山裾^{すそ}を100メートル程走って防空壕へたどり着いた。砲弾^{ほうだん}の炸裂音^{さくれつおん}が少し遠のいたような気がした。壕の中はもういっぱいの人であった。皆、声を殺して押黙^{おしたま}って立っていた。長い時間が過ぎ、やがて東の空が白み始め、何人か^{しら}で恐る恐る外へ出てみた。艦砲射撃はすでに止んでいた。雨の後のヒンヤリとした外の空気がおいしかった。私と弟は家へ飛んで行った。

祖母は一晩まんじりともせず、阿弥陀様あみだを念じていた。「もう大丈夫だよ」と部屋へ連れ出し、雨戸を開けた。明るくなった部屋を見て驚いた。

私と弟と祖母の3人は同じ6畳間に寝ていた。窓側に祖母、次に私、その次に弟の順で。私と弟の布団の間は20センチとは離れていない。そこに、幅12~13センチ、長さ50センチ位で、周りがギザギザと鋭くて重い、砲弾の破片が落ちていた。もし、もう少しどちらかに寄っていたら、私か弟のどちらかがその破片で、腹をえぐられて死んでいたに違いない。何と運が良かったことか。蚊帳かやからはい出した時の弟の叫び声は、この破片ふに触れたものだったのだ。このほかに、足元の押入れの中から、もう少し小さい砲弾の破片が1個見つかった。

こうして戦争は現実には私達の身近にせまり、人々に緊張感きんちょうかんと恐怖心きょうふしんを与えた。しかし、前年暮れの兵隊検査けんさで第二種合格おつだったが、理工系学生りこうだったので、召集延期しゅうしゅうえんきになっていた私は、日本が負けるとは思ってもみなかった。戦死するだろうが、最後には必ず勝つと信じていた。



▲電線工場研究室付近の被害
1945(昭和20)年11月16日(日立市郷土博物館蔵)

火の海を逃げまわる

あおき いくひで
青木 昱秀 さん（終戦時10歳）

かんぽうしゃげき
艦砲射撃を受けた2日後、7月19日夜、B29編隊による しょういだんこうげき
焼夷弾攻撃を受け、
日立市街は焼け野原となった。

その日は、けいかいけいほう
警戒警報が出てから家族全員でじんか
人家の少ない山の方へ逃げた。逃げる
途中で日立市街への焼夷弾攻撃が始まり、花火のように落ちる途中で、パッパッ
と分裂しながら火の粉が降りそそいでいるのが見えた。

林の中に軍のぼうくうごう
防空壕があったので、そこに入れてもらった。その壕はつうしんたい
通信隊の
もので、さかんに交信を行っていた。軍の壕なら、ひとまず安心と思っていたら、
しばらくして、頭上でコツンコツンと音がして、焼夷弾がさくれつ
炸裂した。兵隊さんから「ここはもう危ないから山へ逃げるように」と、壕を追い出された。外へ出て見
ると周りは、すでに火の海、林も民家も燃えていた。壕の入口にあった防火用水
の水を頭からかぶり、火のない畑の方に一家で逃げ出した。

畑の周りにも、ようしゃなく焼夷弾が降るよう追いかけて来る。スポン！と
音がして近くに焼夷弾が落ち、花火のように火をふき上げる。近くに田園をみつ
け、あぜみち
畦道を家族バラバラになりながら逃げ、どて
土手の影に身を寄せ合った。焼夷弾
は田園の中まで、ようしゃなく追いかけて来て火をふき上げた。対岸の土手の中
腹にあった一軒家に、焼夷弾が落ち、火が着き、そして丸焼になるまで、幻でも見
るよう見届けた。みとど
翌朝までそこに待機。たいき きたく
帰宅してみたら自宅は全焼、押入れに
あった父の図書が未だ燃えていた。前日、母が買出しへ行き、農家から分けても
らったジャガイモがこ
芋が黒焦げになっていたが、その焼け残りをみんなで食べて空腹
をしのいだ。

3 戦後のくらしと復興 ふっこう

◆戦争が終わると人々はどのようなくらしをしていたでしょうか。
そして、日立市はどのように復興していったのでしょうか。



▲1948～49(昭和23～24)年ごろ(蛭田和生さん提供)



▲バラック小屋 伊藤長助さん画(日立市郷土博物館蔵)

戦後の人々のくらしもきびしいものでした。空襲くうしゅうによって工場はかいは破壊され、田や畑もあれ果ててしまいました。多くの人々が家を焼かれ、家族を失い、食べものや日用品にも不自由する生活をしていました。

日本は、戦争のない国をつくることをめざし、政治や社会の改革を行い、産業を復興させていきました。日立市でも工場での生産が再開すると、人々のくらしもだんだんと良くなり、家や道路もつくれ、まちも復興していきました。しかし、戦争によって失われたどうと尊い命と大切な財産は戻ることはありません。



▲すし詰め学級 昭和20年代(成沢小学校提供)
学校の校舎は焼け落ち、屋外で授業(青空授業)を行う
こともありました。



▲昭和天皇の宮田国民学校視察
1946(昭和21)年11月18日(宮田小学校提供)



▲平和通り1952(昭和27)年ごろ(蛭田和生さん提供)



▲助川新道(現在の銀座通り)1950(昭和25)年ごろ
(日立市郷土博物館蔵)

「平和通り」のものがたり

1951(昭和26)年、日立市戦災復興
計画によってつくり、正式名称は
「県道日立^{ていしゃば}停車場線」です。同年12月
5日に発行された『日立市報』には、
道路の名称を応募総数1,163のうち
180を占めた最多数の「平和通り」に
決定したと書かれています。

道路の完成を記念し、桜の植樹^{しょくじゅ}
が行われ、その後も、地元の人々の
手によって植樹が続けられました。
1970(昭和45)年ごろには桜の名所と
して知られるようになりました。



▲国道6号との交差点からみる平和通り

戦災体験談

じいじの語り伝え

えじり ともかず
江尻 智一 さん（終戦時12歳）

戦争が終ると、すべてのものが180度変わった。「軍国主義」から「民主主義」へ、政治も社会も教育もすべてが大きく変わっていく。どうやって「生きていくのか」不安の連続で、頭も変化に対応できず混乱し目標を失い、不信感や悲惨な負け戦に打ちのめされ、新しい生活へと立ち上がるため心の葛藤、苦しい生活、栄養失調からの死者や病気の増大など、大変さを強烈に味わった。

わたしも、多感な小中学生時に激動のなかで生活したため、人間形成にまで大きな影響を受け、今までの教育すべてが否定され悩み苦しんだ。いまだに、その影響が出ている。生活も学校も遊びもすべて何ものなしかからの出発。焼けてしまった学校は、青空教室、午前午後の二部授業、焼け残った校舎もガラスはなし。冬の冷たい風が吹き抜ける中で、震えながらの授業だった。墨を塗った前の教科書（軍国調な言葉、文章はすべて墨で塗って消した）、新しい教科書も新聞紙の大きさに印刷されたものを折りたたんで使った。実験もなし、ただ、講義一方の授業だった。机や椅子もなし、自分で作った腰掛け用の台を毎日持ち帰りして使った。まだまだ、書ききれないほどの体験があるが、このような激しい変化と困難さに耐えた小中学校時代であった。

今の平和な国と生活は、命をかけて国を守り築いてきた先人のお陰と感謝し、日本人としての誇りと、伝統・文化を守り、日々の幸せな生活ができることを願っている。また、「生きる」ことの素晴らしさを大切にし、もう二度と悲惨な戦争をしない日本にするために、今できることを力強くみんなで頑張っ
て欲しい。

6歳の終戦

せきね まさこ
関根 政子 さん（終戦時6歳）

函館から青函連絡船に乗り、青森へ着いたのは夕方だった。明日の朝まで汽車はなく、足止めとなりました。まず目に入ったのは、一面焼け野原の光景でした。いつ空襲を受けたのか、まだあちらこちらでくすぶっている様子で、人の姿もなく、青白い煙が、その光景を隠すように低くただよっていました。6歳だった私には不思議な世界に迷い込んだ様に思えたものです。良く見ると、所々に小さな掘立小屋がたっています。夕飯の支度でもしているのか、小さな煙突から休み休み煙が上がっています。

母はそんな小屋を一つ一つ訪ね「休ませて」と頼み歩きましたが、誰もそんな余裕がありません。途方にくれた母は「今夜は野宿ね」とつぶやきました。私は「おなかがすいた」と言おうとして母さんを見ると、まだ赤ん坊の二番目の弟は

ミルクも与えられず、ヒーヒーと微かな声で背負われたまま泣き、母は途方にくれていました。そんな母を見てかわいそうになり「大丈夫、大丈夫」私はお姉ちゃん、母さんを助けなくちゃと笑ってみせました。そんな時、一人のおばさんが「お嬢ちゃん達ここでお休み、大変だったね」といって小屋の中に入れてくれました。母は「何も持ち合わせがないけど」と言ったて炊く事もできず持っていた生米一升をお礼に差し出しました。

「何もねえけど」とおばさんは汁を出してくれました。その時頂いたお芋の汁は、生涯忘れられないものになりました。何日かぶりに敷物の上で休みました。

サクサクサク、お米をとぐ音が聞こえてくる。母さん朝食の支度をしているんだ、そっと辺りを見ましたが…ああ、夢だったと思いました。しかし、本当にふんご飯の炊けるいい匂いがします。夢じゃない、私はそっと起きだし、おばさんのそばへ行きました。すでに上の弟もお釜のそばにいます。おばさんがお釜のフタを取ると、炊き上がったご飯のにおいがし、わあっと二人で手を叩きました。おばさんは熱々のご飯でおむすびを作って、私達に「はい、お待たせ」と手渡してくれました。

赤ん坊には自分が食べるお粥の上汁をすくってミルク代わりにと差し出しました。こんなに親切な人が居るなんて本当に嬉しく、母は何度も頭を下げ、私達は駅に向かいました。私はしばらくの間あのおむすびを作るおばさんの赤くなった手の平と、その中できらきら光るおむすびを思い出していました。



▲体験談挿絵: 柴田伸延さん



▲郷土博物館のたてもの(上)・展示室(下)

日立市郷土博物館にいきましょう！

日立市郷土博物館には、たくさんの資料が展示・保存されています。

この本で紹介している資料の多くは、郷土博物館にあるものです。戦争について調べる時は郷土博物館へ行って、実際の資料をみて、いろいろなことを調べてみましょう。



▲1945(昭和20)年7月17日の艦砲射撃の破片(左)と19日に投下された焼夷弾(右)(日立市郷土博物館蔵)

日立市郷土博物館

〒317-0055 日立市宮田町5-2-22 でんわ 0294-23-3231

4 日立市の平和啓発事業 けいはつ 2016(平成28)年4月現在

◆日立市では平和を守るために、どんなことをしているのでしょうか。

●平和啓発こうこくとう広告塔などの設置

【広告塔】 日立市十王支所敷地内、日立・高萩広域下水道組合敷地内
小木津駅ロータリー、国道6号石名坂十字路、国道245号みなと町入口

【銘板】 新都市広場、常陸多賀駅ロータリー
「核兵器廃絶・平和都市宣言」がしるされています。



▲国道245号みなと町入口の広告塔



▲常陸多賀駅ロータリーの銘板

●日立市平和展の開催

「核兵器廃絶・平和都市宣言」(1985(昭和60)年12月24日)の考え方をもとに、日立市の戦災状況や戦時中の生活の様子げんぱくの写しやう真、さらには原爆に関する写しやう真ポスター等の展示をおこない、戦争の悲惨ひさんさと平和の尊とうとさを広く市民に訴え、戦争と平和に関する意識啓発いしきけいはつを図るものです。
宣言翌年の1986(昭和61)年から毎年8月に開催しています。



▲第29回日立市平和展の様子



●「平和への旅」^{せいしやうねん はけんじぎやう}青少年派遣事業

「核兵器廃絶・平和都市宣言」にもとづく平和啓発事業の一環として、終戦50周年の1995(平成7)年から3年ごとに、市内中学生を被爆地である広島市及び長崎市に交互に派遣し、^{げんぱくぎせいしやいれいへいわ きねんしきてん}原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への参列や^{さんれつ}原爆資料館見学等を通じて、戦争の悲惨さと平和の大切さ、命の^{とうと}尊^{ていきやう}さについて学ぶ機会を提供しています。



▲2011(平成23)年度の派遣(広島市)



▲2014(平成26)年度の派遣(長崎市)

●「平和の鐘」^{かね}建設

終戦50周年の1995(平成7)年8月15日に、永久に戦争のない平和な世界の実現を願う日立市民の心の^{ひやうしやう}表^{いれい}象として、戦災者への慰霊の意を込め、建設されました。



◀日立駅前に建設された「平和の鐘」

清水目千加子さん作の「平和の鐘…祈り」や日立市ゆかりの作曲家吉田正氏の曲などが、カリヨンという14個の鐘によって奏でられます。

●ワールドワイド・ピース・マーカー

アメリカの造形作家ティーテ・バッケローさんの発案で、世界の各国に世界平和の象徴しょうちょうとしてひとつずつステンレス製マーカーを設置し、世界平和の啓発けいはつに努めることを目的としている事業で、日立市は日本で唯一の設置都市として選ばれ、終戦60周年の2005(平成17)年8月15日に、「平和の鐘」の脇わきに設置されました。(世界で5番目の設置都市となりました。)

●終戦70周年記念事業「語りつぐ平和への想い」と記録集作成

市内の戦災体験者による講話こうわと、戦争体験記録文集「十四歳の戦争」執筆者しっぴつと県立日立第二高等学校放送部との対談たいだんと朗読ろうどくを実施し、平和への想いを伝えました。

また、戦災体験者6名へのインタビュー映像と、市民25名から寄せられた体験談をもとに、記録集「未来へと語り継ぐ日立の戦災」を作成しました。



▲記念事業「語りつぐ平和への想い」の様子
体験談講話(皆川直司さん)(上)
対談(執筆者 大越ハルエさん、亀山節子さん、
日立第二高等学校放送部のみなさん)(下)



▲記録集の表紙

編集にあたって

- ・掲載されている戦災体験談は、平成27年度の終戦70周年記念事業において、お寄せいただいた体験談のうち12名の体験談を、紙面の都合上、内容や趣旨をそこなわな
いよう一部抜粋したものです。文章については一部編集して掲載しています。

【掲載体験者一覧】敬称略・掲載順

熊谷勝典、北見徳治、鈴木静枝、小林進、皆川直司、内山英子、渡辺真喜子、
安藤靖子、西村春男、青木昱秀、江尻智一、関根政子

- ・終戦70周年記念事業では、平成28年3月に『終戦70周年記念事業「未来へと語り
継ぐ日立の戦災」』を発行しています。
- ・体験談における標記については、当時の呼称に従いました。
- ・事実が確認できない部分については、体験談の記述を尊重しました。
- ・掲載写真の提供者名については、提供当時の名称で掲載しています。
- ・掲載されている資料はすべて日立市郷土博物館に所蔵されています。
- ・編集にあたっては日立社会科同好会、日立市郷土博物館、日立市教育委員会指導課、
日立市生活環境部市民活動課で、編集会議を実施しました。

表紙：平和の鐘（日立駅）

「日立の戦災」小中学生 平和学習資料

平成29年3月発行

編集・発行 日立市生活環境部市民活動課

連絡先 〒317-8601 茨城県日立市助川町1丁目1番1号

TEL 0294(22)3111 内線 535

FAX 0294(24)5301

Email kokubun@city.hitachi.lg.jp